

第 37 回アパレル工業技術セミナーが開催されました。

開催概要

会場 東京・港 霞会館

期日 2018 年 6 月 19 日（火） 13：30～16：00

講演テーマ

(1) 「アパレル EC におけるフィッティング性能評価に関する国際標準化」の進捗状況

講師 日本アパレル工業技術研究会 常任顧問 中山悦朗氏

(2) 「洋服作りは人作りの道」

講師 株式会社辻洋装店 専務取締役 辻吉樹氏

2018 年 6 月 19 日（火）に霞会館（東京・港）で日本アパレル工業技術研究会（アパ工研）の主催による第 37 回アパレル工業技術セミナーが開催された。約 50 名と会場はほとんど満席であった。

近藤繁樹会長挨拶

はじめにアパ工研会長の近藤?樹氏から挨拶があった。近藤氏によれば、ヨーロッパではアパレルの物作りを現在でもしっかりやっている。これに対して日本はアパレル製造をほとんど商社に丸投げとなっていて、国内製造業も激減してしまったため、物作りの基盤が消えそうになっている。一例として私のワイシャツのボタンが 2 つ取れてしまったので品質管理部長に話をした。そのとき、その部長は「本縫いで付けているため問題ないはずだ」と答えられたが、本縫いであっても縫い調子が悪ければ取れてしまうことをご存じなかった。物作りのベースは機械、人などの他サイズの標準化、CSR などであり、これらはアパレル産業のインフラ（基盤）である。アパ工研は前身の衣料産業研究会議の時代から 50 年をわたって衣料サイズの標準化はじめアパレル生産のインフラ整備に力を入れてきた。厳しい日本のアパレル製造業界の中でしっかり経営をやっておられる、前回講演していただいた光和衣料の坂社長に引き続き、今回は辻洋装店の辻吉樹専務に講演をお願いした。

講演 1 中山悦郎氏

衣料サイズと ISO

衣料サイズの国際標準化などに取り組んでいる ISO の技術委員会である ISO/TC133 の進捗状況についてアパ工研顧問の中山悦朗氏から説明があった。ISO/TC133 についてはシリーズの 4 回目となる。

ISO のサイズ規格は 3 つある。これらはヨーロッパの規格（EN）をベースとして ISO にするよう進められてきた。ここ数年の検討の結果、衣料サイズ規格が改訂された。これに伴い日本の JIS を改訂する必要がある。JIS は任意規格であり法律ではないが、正しいサイ

ズ表示は消費者とメーカーの信頼関係となる。私が現在来着ているジャケットのサイズ表示は「身長 165 AB4」となっている。自分のヌードサイズを知っていれば容易に選択することが出来る。

ISO の改訂内容

その後、ISO の具体的な改訂内容の説明があった。たとえば従来の着用者区分が ISO では男子、女子、外衣、肌着、上衣、下衣などであり、具体的なサイズは入っていない、JIS は成人男子、少年少女の区分、アイテム別、フィット性の必要性などに分類され、寸法も入っているなど細かく規定されている。今回の ISO の改訂ではアイテム別となり JIS に近くなったが、具体的な寸法はやはり入っていない。ISO/TC133 では過去に寸法を入れる方向で検討したが反対が多く、IS 規格とならず TR(技術報告書)にとどまった。その後各国で具体的なサイズ規格が進められてきた。

今回は ISO8559-2 の説明だが、これはサイズ表記の規格であり、アイテム別に表示すべき部位が決められた。Pd はプライマリーディメンジョンと言い、必ず表記しなければならない部位であり、Sd はセカンダリーディメンジョンといいオプション項目となっている。詳しくは資料を参照していただきたい。

前回身体計測基準である ISO8559-1 を高部先生に説明していただいた。次回は ISO8559-3 の説明を予定している。これはサイズピッチの規格だが具体的なピッチの寸法ではなくサイズピッチの設定方法が規格となっている。また現在日本からの提案でデジタルフィッティングに関して 3 つの規格が進められている。これらは次回からこのアパレル技術セミナーで 3 回に分けて説明していく予定である。

JIS 改訂予定

3 つの ISO が改訂されたことに伴い JIS を改訂する。当初今年度 1 年で作る予定であったが、経産省から市場に対する影響が大きいため、今年度は準備期間として業界の意見を聞き、3 年計画で取り組んでほしいとの要望があり、そのように進める。

私は衣料の JIS に 2000 年から対応しているがたくさんの質問が来る。一例を挙げると「S,M,L」のサイズ範囲を書かなくても良いかとの問い合わせがあった、S,M,L は範囲表示と言って JIS 男子の M ではチェスト 88~96、ウェスト 76~84 などと規定されている。もしこれと異なることを記載する場合、JIS は任意規定なので自己責任で記載し、顧客のクレームは

自社解決してほしいと答えている。このようにいろいろな意見がありこれらを調整しながら新たな JIS にしていきたい。

講演 2 辻吉樹氏

辻洋装店の現状

辻吉樹氏からは婦人服製造の考え方、東京でのアパレル製造の実態、人作りの取り組みなどについて講演いただいた。辻洋装店は東京・中野駅から徒歩 15 分ほどのところでプレタ

ポルテといわれる高級婦人服を製造している。創業は昭和 22 年。当時祖母が神田で穀物問屋をやっていたが疎開したのが中野で、はじめは 5 名ほどで洋服を作っていた。

東京の婦人服組合は昭和 25 年には 791 社あったが平成 29 年では 57 社。その大部分は地方工場であり、東京は事務所だけとなっている。現在生産事業体として残っているのは 10 社程度だろう。社員は 51 名、平均 27.8 歳になる。全員日本人で研修生はいない。デザイナーの要望は「くるりん」「ふわっつ」「垢抜けたイメージ」など日本人でもわかりにくい。東京で良いことは取引先と現物を見ながら直接打ち合わせが出来ること。また、ファッションに携わりたい人はファッションの町で仕事をしたいとの要望を持っている。展示会やコレクションを見に行くことも行くことも容易だ。ただし東京は土地も人も高い。工場は 3 階建てが 2 棟だがまっすぐ歩けないほど狭い。

物作りの考え方

「洋服作りは人作りの道」が今回の表題だが、まず製造上ではパターンに力を入れている。お取引先の求めるレベルやテイスト、素材に応じて多少の調整を図っている。調整範囲は 1mm から多くて 5mm 程度。特に外国の生地は色やセンスは良いが安定しない。裁断は粗裁ちして一晩リラックスさせてからバンドナイフで裁断している。まもなくこれを自動化する予定。縫製は 4 名 1 組のグループ生産で 7 グループある。3 名がミシン、1 名がアイロン専門となっていて、グループ（班）で一日一日製品として仕上げている。それ以外に自動機・省力機グループがある。縫製は毎日のようにトラブルがある。班での量産を前提にサンプルを作るが最初に作ったサンプルや班長のサンプルと量産で同じように行かないことがある。トラブルが出たときには次の日には修正した方法で進めている。仕上げ工程は立体プレスと仕上げアイロンだが、ほとんどが吊しアイロンで終わっている。

自立性と自発性

社員には私の命令で仕事をするのではなく各自が自発的、自立的に仕事をしてもらいたい、同じ走るなら「罰ゲームで走る」のではなく「皇居一周マラソン」のように走れと言っている。各自の成績は毎週、毎月、毎年と金額でわかるようにしている。「学校を出ると企業でお金がもらえる」のではなく自分で稼ぐことを知ってもらう。自己ベストを出せるように「9×9 の曼荼羅チャート」を書いてもらっている。これは大谷翔平のまねだが目標を実現するために何をすべきかを自分で決めることであり、手書きで書いている。いやいや作ったら人を楽しませるファッションは出来ないだろう。

HPの作成

製造企業なので営業は下手。しかし世間に知られなければ仕事も来ないので、HPを作った。取引先からはプレッシャーもあったが「求人のため」と言っている。最近はいろいろなところから工場見学に来る。たとえばキルギス、ガーナ、チュニジアなど。上海で 1000 人の工場をやっていたが今は 100 人になってしまい、東京で本当にやっているのか確認に来たところもあった。東京での仕事は下りのエスカレーターを逆に登っているようだ。今でも残っている理由を考えると 76 歳になる父（社長）の” 経営者の心が大切だ ” という考えが

大きい。「ハエや蚊の飛んでくるような”臭い会社”ではなく、蝶の飛んでくる”きれいな花のような会社”になれ」「社員は我が子のように育てなさい」「会社は社員の幸せのためにやっている」など。従って服を作る会社ではなく、人を作る会社なのです。広池千九郎の”道徳と経済は一体である”や二宮尊徳の”道徳なき経済は罪悪であり 経済なき道徳は寝言である”などを企業理念としている。そして企業理念は実行することで意味がある。

社員教育

辻洋装店では社員に「初めての給与」は親に報告・挨拶をすることを義務づけている。これは会社命令でもあります。親に感謝や安心を与えられない人が「お客様は神様です」などといえることはない。そして毎月の給与の時に親に手紙を書くようにしている。それに社員の写真を付けている。これで親の心配も少しはなくなると思われます。私には兄弟が 3 人いて同じ辻洋装店で仕事をしている。社員の前でけんかはしない。もちろん議論はさんざんする。3人でどうしても議論が合わないときは社長の決裁をもらうという取り決めをしている。企業が永続することは取引先の信頼の元でもある。

工場見学はオープンなので皆様も是非おいでいただきたい。

(知久幹夫)